

## 学位論文の要旨

20 世紀転換期ハワイ華僑社会の政治活動に関する研究

論文題目 The Study of Political Activities in the Chinese Community of Hawaii at the Turn of the 20th Century

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

学生番号 D194389

氏名 吳 憲占

本稿は、中国近代史を中国本土からだけ見る視点を超えて論じることを目指している。具体的には、20 世紀転換期（1898－1903）におけるハワイ華僑社会の政治活動を題材として、従来の革命およびナショナリズムという視角からではなく、清末華僑の主体性という観点から議論するものである。

先行研究において、「革命」という言葉は疑いなく中心的な位置を占めている。しかし、華僑にとって、自らが頼りとする政府を樹立するためには、革命以外の選択肢も存在する。20 世紀転換期のハワイ華僑社会において、多くの華僑が戊戌政変で海外亡命中の康有為や梁啓超など、立憲君主制による中国の近代化改革を目指す維新派に共鳴し、孫文の革命派とは対立関係にあった保皇会を通じて積極的に政治活動を行っていた。ハワイ華僑と保皇会との関係を考察することは、清末華僑社会における複雑な政治構図を読み解くための一助となると考えられる。

孫文の活動を中心とした革命史の叙述と表裏一体をなしているのは、ナショナリズムに基づくアプローチである。このような研究において、華僑は亡命政治家によって近代国家の樹立に動員され、母国に対するアイデンティティが醸成されたことが強調されている。無論、華僑にとって母国とのつながりも重要であるが、マイノリティとして現地の主流社会と良好な関係を構築することが、現実的には喫緊の課題であった。20 世紀転換期のハワイ華僑はハワイ合併や清朝領事館の設置など一連の政治変動を迎え、保皇会の成立を契機に、ナショナリズムに収斂できない政治活動を展開するようになった。各自の政治立場に基づく各方面の活動を通じて、華僑の主体性が確認できる。

以上のような問題意識に基づき、先行研究に学びつつ、各章でメディア、人物、団体、事件という四つの角度から分析を進めてきた。その内容をまとめると、次の通りである。

第 1 章では『清議報』を素材に、華僑社会の実態を俯瞰し、亡命中の維新派の営為とそれに対する華僑社会の対応を多方面から検討した。世紀転換期の華僑社会では差別的な防疫政策などに象徴される境遇の悪化を背景に、ナショナリズムが形成されるとともに、国内の政治状況に関心を寄せるようになった。このような気運に乗じて、

維新派は保皇会を軸に海外活動を展開した。

華僑社会の内部においては、保皇会は従来の領事館と中華会館以外の新たな勢力として登場し、華僑の声を代弁する一方で、既存の社会秩序に衝撃を与えた。維新派の海外活動を契機に、華僑は保皇会に組織され、海外から国内に向けて政治的存在感を示している。また、華僑の有識者が学会と学校の開設、社会団体の結成、風俗の刷新など多くの分野で社会の革新を図ろうとし、政変で頓挫した国内の変法運動が華僑社会において復活していた。そして光緒聖誕祭、孔子聖誕祭、烈士祭など近代的な祝典は、華僑自身の主体性を意識しながら開催された。それらの祝典は維新派の国民統合の構想を越えて、華僑社会がホスト社会に対して自らの「文明」を示す場となった。第1章の最後では、『清議報』の発行に象徴される維新派の活動を契機に、世界各地の華僑は『清議報』がつなぐネットワークにより、情報の共有と感情の共鳴を実現し、華僑としてのアイデンティティ、あるいは共同体意識を培いつつあった可能性について指摘した。

第2章では1899-1900年の梁啓超のハワイ訪問について、現地の英字新聞や文書を中心に述べ、あわせて馮自由の「名は保皇、実は革命」という梁啓超批判に関する通説を再検討した。ハワイの華僑社会には戊戌変法と維新派への関心が早くから高まっており、梁啓超の訪問を長らく期待していた。しかし彼は外来者として、華僑社会に根を下ろした組織を通じて華僑と更なる信頼感を築いてこそ、保皇会の動員を推進できたのである。また、梁啓超は複数のインタビューにおいて、自分の改革志向と孫文の革命理念を峻別している。このように、梁啓超が保皇会の事業を展開したことに対して、馮自由は孫文の役割を誇張してゆく。

馮自由の叙述を踏襲した梁啓超のハワイ訪問に関する一般的な認識は、孫文が1903年末にハワイ保皇会の勢力と対抗するようになってから、その原形が形成された。さらにいえば、孫文の議論はそもそも梁啓超のハワイ訪問を評価するものではなかったが、馮自由が梁啓超のハワイ訪問期に時間を巻き戻し通説を形成したと推測できる。「名は保皇、実は革命」という言い方は、革命派と立憲派との論争の中で、1906年以後に梁啓超批判の論拠として胡漢民によって公的に提起された。民国期において国民党が権力を掌握し、孫文崇拜運動が展開される中で、梁啓超のハワイ訪問は再び取り上げられ、孫文の革命指導者像を形成する一環として利用されるようになったのである。

第3章では、ホノルル保皇会の設立に着目し、華僑社会、清朝政府の領事館、ハワイ政府の動向と英字新聞に見るホスト社会の反応を描き、華僑の主体性とその世界史における位置を探ることを試みた。楊蔚彬領事は梁啓超と保皇会の活動を阻止しようとした。ハワイの白人の内部には、保皇会を危険視し、ハワイ社会の安定と清朝政府との外交関係を優先させる立場もあれば、アメリカの建国理念から出発して、立憲政治の志向を持っている亡命政治家の庇護を訴える立場もある。ハワイ政府は当初、正

当な政治権利として保皇会の法人化に異義がなかったが、楊蔚彬領事と彼の支持者の継続的な働きかけを受け、そして保皇会自身の証言における矛盾点も問題視され、最終的にその登録申請を拒否したのである。

ハワイ華僑は中国本土の政治運動と呼応する形で、ホスト社会での位置づけを探っていた。ホノルル保皇会は、弁護士を雇い、ロビー活動を行ったり、マスメディアを利用したりして、ホスト社会における自らの合法的な権益を守ろうとした。他方、古今輝のように、ホスト社会の課題に向かいながら中国本土の政治変動に「保守」的に対処する華僑もいて、自分たちなりにその主体性を発揮している。

第4章では中華会館の役員選挙に端を発した華僑社会の内紛及び権力構造の変動を明らかにするとともに、この内紛の延長として中米両政府の交渉を取り上げて、ハワイ華僑の政治活動の歴史的意義を再評価した。1900年のチャイナタウン炎上事件は華僑のナショナリズムの形成につながっただけでなく、華僑社会における内紛のきっかけにもなっている。華僑社会の統合団体である中華会館の主導権争いをめぐって、保皇派と領事派の対立という政治構図が浮き彫りになった。中華会館が成立してから続いていた、古今輝など清朝政府に近い華僑による暗黙の権力交代は維持できなくなり、保皇派華僑が勝利した選挙の結果はハワイ政府の行政権や司法権によって確認された。このことが示すのは、保皇会の成立がハワイ華僑社会内部の権力構造の変容をもたらしたということである。

また紛争はハワイ政府の存在感を示しただけでなく、ハワイをこえて、アメリカ政府と清朝政府の国家間の交渉に至った。争点となる中国の伝統法制度である縁座制について、アメリカ政府は人道主義的な考慮、国際法及びアメリカの建国理念に基づいて、清朝政府に対し近代国家的な法理念の見直しを促した。それに対して、清朝政府は問題を個別官僚の不正に矮小化し、縁座制に対する理念の見直しを根本的に回避していた。だが、この紛争に深く関わった伍廷芳がのちに清朝の司法改革に携わったことを踏まえれば、保皇会の政治的な活動が清朝の近代法受容にむけての動きを促進したといえよう。

終章では、それまでの行論をまとめ、本稿を従来の研究史のなかで位置づけた。本稿は清末革命派の最大な競争者とされる保皇会の動静を取り上げて、華僑社会における政治活動の多岐にわたる展開を明らかにしようとした。また、本稿は革命や保皇以外の政治立場を持つ華僑にも光を当てた。清朝政府の領事館のもとに活動していた彼らは、保皇会による従来の秩序の「破壊」を阻止するために、自分なりにその存在感を示していたのである。要するに、清末政治史や華僑史の全体像を把握するためには、辛亥革命という歴史の帰結にとらわれず、同時代史における可能性を尊重し、革命派以外の勢力の主体性も視野に入れるべきである。

従来の研究はナショナリズム、すなわち華僑における母国に対する政治や文化のアイデンティティの発見・動員に注目するものである。本稿は世界各地の華僑社会が『清

議報』のつなぐネットワークを通じて、自分なりにアイデンティティを形成したと主張する。その一方で、近代国家の形成期に誕生した近代的な儀式や記念活動が、華僑社会において、どのようにホスト社会との関係構築に用いられたかについても論じた。そこから華僑のアイデンティティが中国人として母国に向けられただけでなく、ホスト社会との融合も目指していたことが理解できるのである。

清末華僑における世界史の意味を探るために、本稿は彼らが身を置くホスト社会にもかなりの紙幅を費やした。華僑がホスト社会に付与される条件や制限の下に政治活動を展開した一方で、ホスト社会の側は華僑社会を通じて自分の位置づけを確認した。

最後に、アメリカ籍の保皇会員をめぐる中米両国の交渉が最終的に中国自身の近代的な法理念の整備につながったという事例を明らかにしたことは、華僑における越境の可能性を提示していると思われる。租界と中国の近代化との関係が盛んに論じられるように、本稿が明らかにした華僑社会と中国近代化との関係に関する 20 世紀転換期ハワイ華僑社会の事例は、中国近代史における華僑の位置づけの再評価を促すのである。